

急速反復書字によるスリップの発生メカニズム： ADHD傾向のアナログ研究

仁 平 義 明[§]

The mechanisms of slips of the pen induced by Rapid Repeated Writing:
An analog study of ADHD tendency

本研究は、「急速反復書字」という実験手続きによって誘発される、意図しない文字を書いてしまうエラー“書字のスリップ”がどのようなメカニズムによるものであるかを検討したものである。そのために、注意欠陥／多動性障害（ADHD）が持つどの要素がスリップの出現しやすさと関連するか、非臨床群による“アナログ研究”を行った。このスリップには、「過剰活性化」と「抑制の失敗」の2つの要因が関係していると考えられる（仁平，1991）が、この2つはADHDの基本症状群のうち「多動性」と「衝動性」という特徴に対応しているからである。

同時にこの研究は、ADHD傾向が、これまでADHDについて検討されたことがない課題のパフォーマンスにどのように反映されるかを明らかにする意味を持っている。

[§]白鷗大学教育学部

1. 不注意・過活動・抑制メカニズムの障害としてのADHD

アメリカ精神医学会の精神疾患の診断と分類の手引きDSM-IV-TR(2000)による診断基準では、ADHD(Attention - Deficit / Hyperactivity Disorder)は「不注意、多動性、衝動性」基本3症状から構成される障害である(表1)。WHOの精神および行動の障害の臨床記述と診断ガイドラインICD-10(1992)による「多動性障害」(Hyperkinetic Disorders)でも同じ意味の「不注意、過活動、衝動性」が基本3症状になっている。

表1 「注意欠陥/多動性障害」の診断基準(DSM-IV-TR; APA, 2000; 高橋・大野・染矢訳, 2002)

A. (1)か(2)どちらか:

(1) 以下の不注意の症状のうち6つ(またはそれ以上)が少なくとも6ヶ月以上続いたことがあり、その程度は不適応的で、発達水準に相応しないもの:

<不注意>

- (a) 学業、仕事、またはその他の活動において、しばしば綿密に注意することができない、または不注意な過ちをおかす。
- (b) 課題または遊びの活動で注意を持続することがしばしば困難である。
- (c) 直接話しかけられた時にしばしば聞いていないように見える。
- (d) しばしば指示に従えず、学業、用事、または職場での義務をやり遂げることができない(反抗的な行動または指示を理解できないためではなく)。
- (e) 課題や活動を順序立てることがしばしば困難である。
- (f) (学業や宿題のような)精神的努力の持続を要する課題に従事することをしばしば避ける、嫌う、またはいやいや行う。
- (g) (例えばおもちゃ、学校の宿題、鉛筆、本、道具など)課題や活動に必要なものをしばしばなくす。
- (h) しばしば外からの刺激によって容易に注意をそらされる。
- (i) しばしば毎日の活動を忘れてしまう。

(2) 以下の多動性・衝動性の症状のうち6つ(またはそれ以上)が少なくとも6ヶ月以上持続したことがあり、その程度は不適応的で、発達水準に相応しない:

<多動性>

- (a) 学業、仕事、またはその他の活動において、しばしば綿密に注意することができない、または不注意な過ちをおかす。
- (b) しばしば教室や、その他、座っていることを要求される状況で席を離れる。
- (c) しばしば、不適応な状況で、余計に走り回ったり高い所へ上がったたりする(青年または成人では落ち着かない感じの自覚のみに限られるかも知れない)。

- (d) しばしば静かに遊んだり余暇活動につくことができない。
 - (e) しばしば“じっとしていない”またはまるで“エンジンで動かされるように”行動する。
 - (f) しばしばしゃべりすぎる。
- <衝動性>
- (g) しばしば質問が終わる前にだし抜けて答えてしまう。
 - (h) しばしば順番を待つことが困難である。
 - (i) しばしば他人を妨害し、邪魔する（例えば、会話やゲームに干渉する）。
- <以下, BCDEは略>

症状群のうち、とくに「衝動性」を構成する3つの項目、「しばしば質問が終わる前にだし抜けて答えてしまう」、「しばしば順番を待つことが困難である」、「しばしば他人を妨害し、邪魔する」は、ADHDという障害がその場面では一時的に抑制しなければならぬ反応を行動化してしまう、抑制メカニズムの障害でもあることを示している。

こうした症状そのもののほかに、ADHDが抑制メカニズムの障害であることを示す証拠は、たとえば、ある刺激に対しては反応を行う（Go）が別な刺激には反応を抑制しなければならない（NoGo）という弁別的反応が要求される“Go-NoGo課題”でADHDの子どもが反応を抑制できないエラーをより多く犯すという報告にある。こうした課題での抑制にかかわる脳の部位についても研究が進んできており、ADHDのメカニズムの解明が期待されつつある（Durston et al., 2003）。

2. 急速反復書字とスリップ

意図した行為とは異なる行為を実行してしまうエラーは、とくにスリップ（slips）と呼ばれる（Norman, 1981）。

同じ文字をできるだけ速く繰り返し書き続ける「急速反復書字」（Rapid Repeated Writing; RRW）は、書こうと意図しなかった文字を書いてしまう、書字の「スリップ」を容易に引き起こす（Nihei, 1986; 仁平, 1990）。

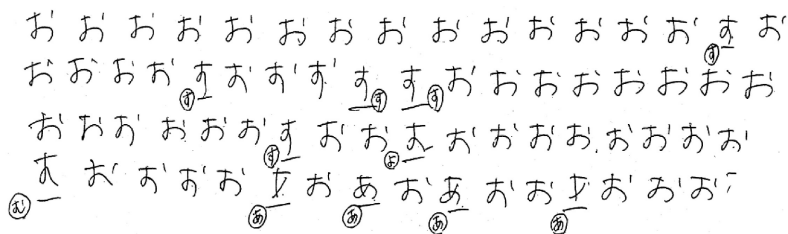


図1 平仮名「お」の急速反復書字で生じるスリップの例

この例でも、下の文のケースと同様に、急速反復書字によって、書こうとした「お」とは別な「す」「む」「あ」が次々とスリップとして出現している。このことは、平仮名の文字の運動記憶のネットワーク内に活性化が波及し、活性化した、書こうと意図していない文字「す」「む」「あ」の運動記憶が抑制されずにトリガーされてしまうことでスリップが起こることを示唆している。

RRWでスリップが起こるのには、活性化された意図していない文字の運動記憶が抑制されず、トリガーされてしまうことによると考えられる（仁平，1990，1991）。

「RRWでは、活性化された（書いている文字の）運動記憶は、それとリンクしている他の運動記憶を同時に活性化する。図2のように、一人の被験者の急速反復書字でも、多様な意図しない文字が次々と書かれるエラーが起こることがある。このようなスリップの現れ方からすると、RRWに伴って活性化されている他の運動記憶は、記憶ネットワーク内に複数存在していることが推測される。

こうした状況下で正しい書字が遂行されるためには、**活性化されている複数の書字運動記憶の中からトリガーすべきものを選択し、不適切なものがトリガーされるのを抑制することが必要になる。**」（仁平，1991）

「反復書字では一回ごとに書くべき文字の運動記憶を長期記憶から呼び出し、サイズなどのパラメータ指定をする必要はなくなる。すでに出力バッファにある指定済みの運動プログラムを自動的にトリガーし続けるだけで書字は行なわれる。

このような状況は、意図形成からトリガリングにいたる一連の行為の全過程が繰り返されているのではなく、そのうち一部のトリガリングだけが繰り返されるとい

う極めて特異的な状況である。こうして意図形成部分が欠落すれば、前に述べたように不適切な運動記憶が侵入してきたとき、それがそのままトリガーされることが起こりうる。」(同)

「別な実験(仁平, 1984; Nihei, 1988)も活性化は加重されることを示唆する。これらの実験では、RRWに先だって、被験者にそのRRWでスリップとしてあらわれやすい文字を書かせておくという操作がされる。たとえば「九」の急速反復書字に先だって、「れ」を一定の回数書字させておき、その運動記憶の活性化を高めておくという手続きである。前もっての書字回数に応じてその運動記憶の活性化水準が累積的に高くなり、後でのRRWでスリップが現れやすくなったと考え、この結果は説明しやすい。」(同)

「同様な手続きによる仮名と漢字による実験でも、結果は、スリップとしてあらわれやすい文字を前もって書字させておく回数が多いほど、それに続くRRWでのスリップは促進されることを示していた。」(Nihei, 1988)。

このように、急速反復書字でスリップが起こるのには、活性化の加重によって活性化の水準が高まることと抑制メカニズムになんらかの問題があることの2つの要因あるいはいずれかが関与していると考えられる。

ADHDの「衝動性」を構成する3つの項目をあらためて見てみると、急速反復書字でスリップが生じるときのあらわれ方に類似したものになっている。「しばしば質問が終わる前にだし抜けに答えてしまう」(項目g)は、「しばしば書こうとしていた文字が書き終わる前に、だし抜けに他の文字を書いてしまう」に、「しばしば順番を待つことが困難である」(項目h)は「しばしば書く文字のストロークの順番を待つことが困難である」に、「しばしば他人を妨害し、邪魔する」(項目i)は「しばしば他の文字を妨害し、邪魔する」と言い換えることができる。

ADHDの基本症状である過剰活動、抑制メカニズムの障害のいずれもが、急速反復書字でスリップの発現に共通する条件であり、ADHD傾向者は急速反復書字でのスリップを生じやすいことが容易に推測される。したがっ

て、急速反復書字でのスリップでは、過剰活動、抑制メカニズムのどちらに問題があるか、あるいはその両方であるかについてADHD傾向との関連をみることでメカニズムの推測が可能になる。

そこで、急速反復書字でのスリップとADHDの関連について検討することとした。

3. 急速反復書字でのスリップとADHD傾向の関連： 実験的検討

大学生に急速反復書字を行うように求め、WHOの「成人期のADHDスクリーニングテスト」で測定したADHD傾向とどのような関連があるかを分析した。非臨床群の対象者によるアナログ研究である。アナログ研究(analog study, analogue study)は、たとえば実際の患者や患者による所産・材料、あるいは現実場面などを直接に扱うのではなく、その特徴をもった非臨床群の対象者や状況・材料などを用いたシミュレーション研究の総称である。アナログ研究は臨床群あるいは現実場面が持っている要素の一部を取り出して研究を行うために、臨床群や現実場面で生じやすいノイズ要因を統制でき、また臨床群を対象とする場合におこりやすい研究倫理上の問題をある程度回避しやすいという利点がある。

<方法>

ADHD傾向の測定には、WHO(2003)による18項目のWorld Health Organization *Adults ADHD Self-Report Scale (ASRS-v1.1)* (「成人期のADHD(注意欠陥多動性障害)自己記入式症状チェックリスト(ASRS-v1.1)」)を翻訳して用いた(附録参照)。

対象者は、心理学入門の講義を受講している大学生男女112人。女性60人、男性52人。平均年齢19.1歳(SD1.12)。対象者は、B4サイズの用紙を横に使って、3分間のひらがな「お」の急速反復書字を行った。その後、

同意のもとにADHDチェックリストへの記入を行った。所属学部は、医学部67.0%、歯学部24.1%、経済学部5.4%、工学部1.8%、法学部1.8%。

<結果と考察>

(1) スリップ

3分間に発生した、書こうとしていなかった文字を書いてしまったスリップがカウントされた。平仮名「お」で生じるスリップは、これまでの研究の結果と同様に平仮名「あ」「す」「む」「よ」「ち」が主なものであった。スリップの平均数は、3.07 (SD2.86) であった。スリップ数に、性差はみられなかった ($t=.642, df=110, p=.522$)。

(2) ADHD傾向の因子分析

「成人期のADHD（注意欠陥多動性障害）自己記入式症状チェックリスト（ASRS-v1.1）」は、5段階評定（1＝まったくない、2＝めったにない、3＝ときどきある、4＝ひんぱんにある、5＝いつもそう）を求めるものである。

全対象者の合計尺度得点は平均50.85 (SD8.54)、範囲27-80であった。本来のスクリーニングツールとして使用する場合は、項目番号によってちがうけれど、評定値3あるいは4以上の項目数がいくつであるかが問題になるが、本研究ではこの18項目の評定値について因子分析を行った。その際、ADHDは男の出現率が高く男女で主症状が異なっているという従来知見を考慮して、男性と女性について別に因子分析を行った。

ADHD自己記入式症状チェックリストの単純合計得点は、男性49.9 (SD7.6)、女性51.9 (SD9.4) で、本研究の対象者集団では有意な性差はみとめられなかった ($t=1.204, df=110, ns$)。

探索的な因子分析結果のスクリープロットに基づいて2因子解とすることを決定し、主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った。

その結果、表2・表3のように、第1因子と第2因子の順序は男女間で

異なっていたが、「多動（過活性）と注意のコントロールの悪さ」因子と「抑制メカニズムの障害」因子という男女に共通した因子がえられた。

女性（表2）では、第1因子に負荷量の大きな項目は、「落ち着かなくて動きたくなると感じる事が、よくありますか?」、「単調なことや、逆に面倒なことなどをしているとき、うっかりミスをすることが、よくありますか?」、「会議などで、じっと座っていなければならないのに席を離れたりすることが、よくありますか?」、「じっと長く座っていなければならないとき、手や足をせわしなく動かしたりすることが、よくありますか?」

表2 ADHDチェックリストの因子分析結果：女性

項目 (略文：全文は附録参照)	因子と負荷量	
	1 多動と注意のコントロールの悪さ	2 抑制メカニズムの障害
詰め甘い	.018	.339
全体きちんと苦手	.462	.125
約束忘れる	.480	.140
面倒避ける	.216	.407
せわしなく動く	.639	.046
活動的過ぎる	.265	.304
うっかりミス	.742	.027
注意持続できぬ	.314	.370
うわのそら	.439	.132
置き忘れる	.434	.329
物音で注意それる	.530	.414
席を離れる	.723	.154
動きたくなる	.773	.110
のんびり苦手	.084	.483
自分だけ話しすぎる	.069	.792
相手の話途中で	.209	.731
順番無視し話す	.087	.879
話しかけて仕事中断	.205	.667

*太字は.45以上の負荷量

などで、これは「**多動（過活性）と注意のコントロールの悪さ**」因子であると考えられる。

第2因子に負荷量の大きな項目は、「本来なら他の人が話すべき順番なのに、自分が話してしまうことが、よくありますか?」、「人と一緒にいるときに、自分だけ話し過ぎてしまうことが、よくありますか?」、「会話で、相手がまだ話を終えていない途中で自分の話をしてしまっていることがありますか?」などで、これは「**抑制メカニズムの障害**」因子であると考えられる。

男性の因子分析結果（表3）は、女性の結果と第1因子と第2因子が逆

表3 ADHDチェックリストの因子分析結果：男性

項目 (略文：全文は附録参照)	因子と負荷量	
	1 抑制メカニズムの障害	2 多動と注意のコントロールの悪さ
詰め甘い	.217	.342
全体きちんと苦手	.144	-.007
約束忘れる	.645	-.406
面倒避ける	.472	-.321
せわしなく動く	.334	.127
活動的過ぎる	.000	.535
うっかりミス	.353	.589
注意持続できぬ	.134	.325
うわのそら	.443	.113
置き忘れる	.380	.192
物音で注意それる	.362	.357
席を離れる	.080	.381
動きたくなる	.220	.554
のんびり苦手	-.135	.378
自分だけ話しすぎる	.587	.325
相手の話途中で	.654	.223
順番無視し話す	.571	.350
話しかけて仕事中断	.654	.149

*太字は.45以上の負荷量

になっているだけで、それぞれの因子に負荷量の大きな項目は、ほとんど同一だった。2つは安定した因子であるといえる。

(3) ADHDの因子とスリップの関係

ADHD傾向18項目の単純合計得点とスリップ数の相関は、男女とも有意にはならなかった。ただし、女性では、両者の相関は有意に近いものだった（女性 $r = .225, p = .083$ ；男性 $r = .111, p = .438$ ）。両性とも、ADHD傾向性が高いほどスリップ数は多くなる方向にあった。

ADHDの各因子得点とスリップ数の相関は、男女でちがいがみられた。

「多動（過活性）と注意のコントロールの悪さ」因子得点とスリップ数の関係については、女性では、両者に有意な正の相関がみられた（ $r = .275, p = .033$ ）。男性では、両者の相関は正の相関ではあるが、有意なものではなかった（ $r = .087, p = .549$ ）。これらの結果からは「多動と注意のコントロールの悪さ」は、関係の方向からいえば、スリップの発現に促進的に働いていることが示唆される。

「抑制メカニズムの障害」因子得点とスリップ数の相関は、女性では有意なものではなかった（ $r = .071, p = .588$ ）。しかし男性では、両者の間に有意な負の相関がみられた（ $r = -.317, p = .022$ ）。抑制メカニズムに障害があれば活性化した不適切な運動記憶を抑制できなくてスリップが生じやすくなると考えるのが自然であるが、結果はその逆である。男女でこのような異なる結果がみられたことをどう解釈するか、とくに男性の結果の解釈は単純にはいかない。しかし、いずれにしても、抑制メカニズムが弱いことがスリップを起りやすくさせているわけではないことは、男女に共通した結果である。

4. 急速反復書字によるスリップの発生メカニズムへの示唆

先に述べたように、当初、急速反復書字でスリップが発生するには、①不適切な運動プログラムの活性化水準が高くなることと、②不適切な運動プログラムの抑制がされないことの2つが関与していると考えられる。

「こうした状況下で正しい書字が遂行されるためには、活性化されている複数の書字運動記憶の中からトリガーすべきものを選択し、不適切なものがトリガーされるのを抑制することが必要になる。」(仁平, 1991)

結果は、「多動（過活性）と注意のコントロールの悪さ」はスリップの発生に促進的に働く場合があることを示唆していた。

Norman (1981) は、スリップの発生に働くスキーマの活性化とトリガー条件の満足の間にはトレードオフがあると主張している。活性化の水準が高ければ、トリガー条件が合致していない不適切な場合でも、文字の運動記憶はトリガーされてしまい、書字運動は実行されてしまう。逆に、それがトリガーされるべき条件がそろえば、活性化水準が低くても文字は書かれてしまう。それゆえ活性化水準がある閾値をこえて上昇することは、スリップを出現させやすくすると考えられる。女性の被験者で過活性とスリップの生じやすさには正の相関があるという結果は、Normanの仮説を裏づけるものだといえる。

これに対して「抑制メカニズムの障害」の因子は、少なくともスリップの発現には促進的に働いていなかった。

しかし、「抑制メカニズムの障害」に負荷量の大きな項目を見直してみると、「本来なら他の人が話すべき順番なのに、自分が話してしまうことが、よくありますか?」、「人と一緒にいるときに、自分だけ話し過ぎてしまうことが、よくありますか?」、「会話で、相手がまだ話を終えていない途中で自分の話をしてしまっていることがありますか?」など、抑制といって

も高次の「社会的な抑制の障害」の成分が大きいことがうかがわれる。そのほか、急速反復書字というスピードを要する状況では、活性化された意図したものとは異なる文字の運動プログラムに抑制メカニズムが働くのには、十分な時間的余裕がないのかもしれない。スリップを犯すときに“頭ではわかっているつもりなのに、まるで催眠術にかかったように意図しないように手が動いてしまう”(1990)というような報告がしばしばみられることは、その可能性を示唆している。

また、研究でえられた相関はたとえ有意ではあっても効果量としての相関は低いものだった。これは障害傾向の個人差要因によって、特定動作のパフォーマンスを説明しようとするアプローチの限界を示すものであるかもしれない。

とはいえ、小さな効果量であっても、対象者の一般的な活性化水準が高いことは急速反復書字という特殊な条件下でのスリップを生じさせる効果をもっていた。ADHD患者レベルになると、やはりこの種の“抑えなければならぬ行為”ではハンディを背負っていると考えるべきだろう。

5. ADHDのアナログ研究：利点と問題点

臨床群の障害患者に実験を行う場合、患者には必要な実験条件の統制を求めることで大きな負荷を与えてしまう可能性がある。ADHDの場合、障害の特徴からして、持続して実験に集中すること自体が負荷となる。また、多様な分析にたえるだけの数の対象者にアクセスすることは難しい。その意味で非臨床群による障害のアナログ研究は、臨床群を対象にした研究ではできない検討を可能にしてくれる。

しかし、非臨床群を対象にしたアナログ研究には、対象者集団の選定が結果を大きく左右するという宿命的な問題が存在する。本研究の対象集団は、臨床群からすればADHD傾向の水準が高くなかったためにADHD傾向の分散度が要因の効果を検討するには十分ではなかった可能性が考えられ

る。アナログ研究では、対象者集団の特徴が臨床群に近い、あるいは一部は臨床群に重なる程度まで分散してはじめて、その特徴の効果をみることができるようになる。パラノイア傾向がモーゼ錯覚という課題でエラー発見とどのように関連するかをみたアナログ研究 (Nihei & Sato, 2009) で効果が明瞭にあらわれたのは、臨床的傾向の分散度が比較的高いと推定される非臨床群を意図的に選択した結果でもあった。

アナログ研究では、対象群の選定は最も注意を要する点の一つである。

引用文献

- American Psychiatric Association (2000) Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders (Fourth edition, Text Revision) : DSM-IV-TR. American Psychiatric Association. (高橋三郎, 大野裕, 染矢俊幸, DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引き, 医学書院, 2002)
- Durston, S., Tottenham, N. T., Thomas, K. M., Davidson, M. C., Eigsti, I-M., Yang, Y., Ulug, A. M., & Casey, B.J. (2003) Differential patterns of striatal activation in young children with and without ADHD. *Biological Psychiatry*, 53, 871-878.
- Nihei, Y. (1986) Experimentally induced slips of the pen. In Kao, H.S.R., & Hoosain, R.(Eds.) 『*Linguistics, Psychology, and the Chinese Language*』 University of Hong Kong Press, 309-315.
- Nihei, Y. (1988) Effects of pre-activation of motor memory for kanji and kana on slips of the pen: An experimental verification of the recency Hypothesis for slips. *Tohoku Psychologica Folia*, 47, 1-7.
- Nihei, Y. & Sato, T. (2009) The overly suspicious person is easily deceived: The Moses illusion and paranoia tendencies. *SARMACVIII (The 8th Meeting of the Society for Applied Research in Memory & Cognition)*, Kyoto.
- 仁平義明 (1984) 「書字slipの実験的誘導—書字運動プログラムのpre-activationの効果—」 日本心理学会大48回大会発表論文集, 278.
- 仁平義明 (1990) 「からだと意図が乖離するとき—スリップの心理学的理論—」. 佐伯胖, 佐々木正人編 『アクティブ・マインド—人間は動きのなかで考える—』 東京大学出版会, 55-86.
- 仁平義明 (1991) 「急速反復書字によるスリップの発生メカニズム」 東北大学教養部紀要, 第56号, 172-190.
- Norman, D. A. (1981) Categorization of action slips. *Psychological Review*, 88, 1-15.

World Health Organization (1992) The ICD-10 Classification of Mental and Behavioral Disorders: Clinical description and diagnostic guidelines. WHO (融道男, 中根允文, 小宮山実, 岡崎祐士, 大久保善朗訳, ICD-10精神および行動の障害: 臨床記述と診断ガイドライン (新改版), 医学書院, 2005)

World Health Organization (2003) *Adults ADHD Self-Report Scale (ASRS-v1.1)*. WHO .

【謝辞】 本研究の実験部分は研究者が東北大学在職中に実施されたが、日本学術振興会科学研究費 (課題番号23531306;平成23年度～25年度) の補助を受けて分析と論文の準備が行われた。

<附録>

【成人期のADHD (注意欠陥多動性障害) 自己記入式症状チェックリスト (ASRS-v1.1)】 (WHO, 2003)

過去6ヶ月間の自分を振り返ってみて、以下の文にあることが、どれくらいよくあることだったか、それぞれの右側のあてはまるところの数字を○でかこんでください。

		まったく ない	めったに ない	ときどき ある	ひんぱん にある	いつも そう
1	やるべきことで、大きな山場はこえたのに、最後の細かい詰めの仕事が甘くなってしまうことが、よくありますか？	1	2	3	4	5
2	全体を考えてまとめなければならない仕事を、きちんとやるのが苦手なことは、よくありますか？	1	2	3	4	5
3	約束や用事を忘れてすることが、よくありますか？	1	2	3	4	5
4	じっくり考えなければならない面倒な仕事を避けたり、なかなかやり始められなかったりすることが、よくありますか？	1	2	3	4	5
5	じっと長く座っていなければならないとき、手や足をせわしく動かしたりすることが、よくありますか？	1	2	3	4	5
6	何かにつき動かされているような感じで、自分でも活動的過ぎるであるとか、何かをしないではいられないと感じることが、よくありますか？	1	2	3	4	5

急速反復書字によるスリップの発生メカニズム:ADHD傾向のアナログ研究

		ま っ た く な い	め っ た に な い	と き ど き あ る	ひ ん ば ん に あ る	い つ も そ う
7	単調なことや、逆に面倒なことなどをしているとき、うっかりミスをすることが、よくありますか？	1	2	3	4	5
8	同じようなことが繰り返されるときに、注意を持続しにくくなるのが、よくありますか？	1	2	3	4	5
9	他の人があなたに話しかけているのに、うわのそらで聞いていないことが、よくありますか？	1	2	3	4	5
10	家や仕事場などで、物を置き忘れてしまったり、どこに置いたかわからなくなったりすることが、よくありますか？	1	2	3	4	5
11	物音がすると、すぐにそっちに注意がそれてしまうことが、よくありますか？	1	2	3	4	5
12	会議などで、じっと座っていなければならないのに席を離れたりすることが、よくありますか？	1	2	3	4	5
13	落ち着かなくて動きたくなると感じるのが、よくありますか？	1	2	3	4	5
14	ひまな時間に、のんびりリラックスしているのが苦手なことが、よくありますか？	1	2	3	4	5
15	人と一緒にいるときに、自分だけ話し過ぎてしまうことが、よくありますか？	1	2	3	4	5
16	会話で、相手がまだ話を終えていない途中で自分の話をしてしまっていることがありますか？	1	2	3	4	5
17	本来なら他の人が話すべき順番なのに、自分が話してしまうことが、よくありますか？	1	2	3	4	5
18	仕事の人に話しかけて中断させてしまうようなことが、よくありますか？	1	2	3	4	5